

孫たちと爺々のオリエンテーリング NO 37

幸(中2)・美桜(小3)・沙綾(小2)・綺羅(小2)・来生(幼)・雄市(M70)

オリエンテーリング適性は
幼児期に見抜け！

登山地図でオリエンテーリ
ングゲームをした

爺々の孫育て修行
目指すのは野生的文化人

山では助け合いが第一
食べ物は大事に平等だ



東北第2の高峰「鳥海山」に従兄妹同士で挑戦した左から美桜・綺羅・来生・沙綾

初めての個人レース

綺羅君(小2)と来生君(幼年長)は爺々の勧めもあって、さくらんぼオリエンテーリング大会では個人クラスに申し込むことになった。

来生 「いいいい、ぼくは何のクラスに出るの？」

爺々 「MNというやさしいクラスだよ」

来生 「綺羅は？」

爺々 「綺羅君もMNと同じだよ。綺羅君は2年生だからM10のクラスでも良いと思ったけど、らいちゃんと同じクラスのほうが迷子になったとき探しやすいからね」

綺羅 「いいいい、ぼくらいちゃんよりスタートが早いってママが言ったよ」

爺々 「そうだったね。らいちゃんも短いコースだし森の中も見通しが良いのでゴール出来ると思うよ。らいちゃん、番号を確かめて順番にパンチして来るんだよ」

来生 「うん、ぼくパンチ練習したよ。カードをパンチにはめなくても番号がカードに出るんだよ」

爺々 「綺羅君もパンチを練習したのかな」

さて、スプリント第1レースが始まり、綺羅君の1分後に来生がスタートして行った。

グループクラスを希望して鈴鹿市から参加した片野さん母娘には苦肉の策としてどちらでも早くスタートした方が分かりやすいところで待機し、後から来た連れと合流して一緒にゴールまで進む方法を伝授したことを思い出したが、綺羅と来生の兄弟はお互いにライバル意識を持って初めての個人クラスに挑む様子だ。

ところが、フィニッシュ地区で心配そうに彼らを待っていた爺々は、驚くやらほっとするやら。なんと写真(下)のように同じスキー・トリムを着た3兄弟が、綺羅・幸・来生の順でフィニッシュレーンを駆け抜けているのだ。



少し写真の説明をしましょう。フィニッシュラインから計算センターに続く階段を一番先に登っているのは次男坊の綺羅(右手前)で地図を持ってなにやら得意そうにカメラに向けている。長男の幸は、大会直前に右上腕骨折しギブスした腕を包帯で首から吊っている。三男坊の来生は疲れきった

ようにあごを突き出し左手に持った地図も引きつり加減だ。

兄弟が偶然一緒になったのではない、と、一瞬にして爺々は思った。

爺々 「綺羅君、頑張ったね。間違わなかったの？」

綺羅 「1番がどっちなのか分からなくて立ち止まっていたら来生が追いついてさ、二人でうろうろしてたら幸が教えてくれたんだ」

幸 「僕と綺羅は同じスタート時刻で、心配だったから僕がを取ってきてから来生と一緒に二人のコントロールを教えてやって、その間に僕もM20Aのコントロールをチェックしながら回ってきたんだ」

爺々 「幸、ありがとう。この二人をMNとは言え個人レースに出したので爺々は内心心配していたんだ。幸の骨折が二人の個人クラスデビューを助ける形になったね」

幸は自分のレースを犠牲にして幼い弟たちの面倒を見る判断が育っていた。当然のことかもしれないが爺々は、その成長が不慮の怪我で気の毒でかわいそうな気持ちとは別に、この日の収穫としてとてもうれしく思った

爺々 「らいちゃん、頑張ったね」

来生 「地図のみちが分からなくて難しかった。爺々もっと練習したいな」
 爺々 「あした、また同じところからスタートだから、幸がいなくてもポストに行けるように練習だな」

ニューマップ「樹氷の林 - 夏 2007」はクロカコースの幅が JSSOM2007 に準拠し、実寸のオープン記号表現となり、孫たちにはこれまで参加した大会の地図と違い線上特徴物として認識するには経験が不足だった。



写真上 M12に出場した遠藤崇志君とMNの地図を並べて検討会？をしている綺羅と来生。

その傍ら（写真下）では次々と計センを訪れる参加者に競い合って協賛品のアミノバリューを手渡す孫たち（北村空来と渡辺季香）も居た。



この二人は、表彰式のプレゼンティーターになって入賞者にさくらんぼを贈呈する大役もやってくれた。

修行始めは食べること

夏休みに孫たちが続々と爺々の家に集まってきた。今年も恒例の修行と称して孫たちにとっては難行が始まった。手始めは、日帰り修行で食事を作ることと山の歩き方について体験だ。

場所は蔵王に行ってお釜を見せることにしたが、子供たちにとって一番関心のある食べることから始める。キャンプ場に寄り道し、かまどに薪を入れて火を焚き飯ごうでご飯と味噌汁だけ作って食べた。



悲しいことに、現在の子供たちは火の扱い方、ありがたさ、恐ろしさを体験できていない。

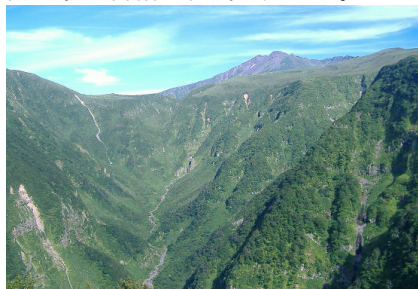


昼ごはん。小さな修行者たちは一汁一菜でも美味しさに十分満足した。

本番は好天と荒天

修行本番は鳥海山の 5 合目山小屋と決めた。8 月 1 日爺々と孫 4 人は朝早く出発した。頼りにしていた一番弟子の幸がサッカーの部活で同行を断念、女の子たちがいるので少々心配だ。下界は今年一番の暑さだったが 1100m の鋒立は涼しい。

翌日、好天なので早速登山することに決心、小さなリュックに爺々から言われた食料や水、着替えや靴下を詰め込む。小屋から少し登ると奈曾溪谷の向こうに目指す新山が見える。



鳥海山は 2236m の活火山

象潟ルートは賽の河原から七五三掛まで複数の登山ルートがあり山岳オリエンテーリングが楽しめる。

それにしても中高年の登山ブームは鳥海山も例外ではなく、幼稚園児より足の遅いグループを狭い登山道で追い

越すのに苦労する。人通りの少ないルートと思って愛宕坂ルートに回ったが子供たちの背丈を越す熊笹に危険を感じて断念した。

御浜小屋の稜線にたどり着いたが風が強くて帽子が飛ばされそうだった。



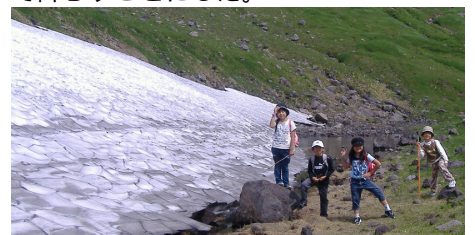
気温も下がり、綺羅と来生は長袖のTシャツに着替えていた。



羽化したばかりの鬼ヤンマが強い風を避けて登山道で羽を乾かしていた。

今日の昼食はカップラーメンを背負ってきたが、この風の強さではガスコンロの置く場所が心配だし、頂上に至る外輪山も相当の強風でこの子供たちには危険だ。そうだ！足元に見える鳥の海（火山湖）の湖畔なら風の影響は避けられる。

目指す場所付近まで雪渓が残っているが用意してきたザイルで体を縛着して降ろすことにした。



恐怖の雪渓も湖底に無事たどり着き、元気にはしゃぎまわる子供たち。

湖底から外輪山を眺めると、ニッコウキスゲやコバイケイソウの花が湖底までは聞こえない風で波を打ち、程よい涼風に孫たちと極楽の中だった。

お湯は気圧が低いので驚くほど早く沸く。みんなのリュックから背負ってきたカップ麺を取り出してお湯を注ぎ昼食にした。



湖岸の思い思いの石に陣を取り食事、デザートは家では誰も食べてくれないマルメロの缶詰が美味しいと言って完売だ。周りに人がいないので、誰に怖ることなくしばらく石投げをして遊んだ。

頂上に登るつもりスケジュールだったので時間はたっぷりある。鳥の海の湖岸を回って再び外輪の登山道に戻り、御田ヶ原分岐を目指して登れるところまで登ることにした。

歩き始めるとやはり遅れがちになるのは沙綾だ。そんな沙綾に「独りぼっちになると熊が出てくるぞ!」という必死で遅れを取り戻す。事実、この付近でこの春山菜取りの女性が熊に襲われて命を落としているので、登山道のいたるところで一人歩き禁止の看板が立っている。

七五三掛まで登ったら、文殊岳までの九十九折のガレ場に団体登山と思われる大人数が、蟻の列のようになって見える。孫たちには未だ元気な体力が残っているがあこの団体を追い越すことも列の後ろで進むこともきわめて危険と判断し、今回はこの場所で引き返すことに決定たっぷり遊ばせた。

(後日談：この場所で8月中旬、中年の夫婦が道を譲るため避けたら谷に転落し怪我してヘリで救出された)



高山植物が咲き乱れる標高 2000m の遊園地だ。勢いが余って丸太ん棒から転げ落ちたり、石に躓いて擦り傷を創ったり本能的に自然児に孵っていた。帰りも孫たちへの隊列は順番が不文律のように決まっていた。



降りでも沙綾は歩くのが遅い。でも、春のオリエンテーリングで遅くなってみんなに追いつけなくて泣いていた沙綾ではなかった。怖いところは手を使ってでも自分でスタンスを工夫して降りてきた。

爺々が時々カメラを構えると風のごとく自分のポジションを確保してポーズをとる。それがこの児の特技かもしれない。



かくして、疲れた頃合いに水を飲み、おやつを食べ、皆で山の歌を歌い、行き交う人々に元気に挨拶し、夕暮れ前に五合目の山小屋にたどり着いた。

人に優しいブナ林

3日目は、秋田県側の中島台レクリエーションの森で出壺(大量の水の湧水箇所や鳥海マリモの湿原を廻った。白神山地には敵わないが雪のため変形したブナの木ともたっぷり遊んだ。



台風飛ばされるな

4日夜半から台風5号の襲来を受け、5日間の予定を変更して切り上げた。孫たちを一人ずつポンチョに包んで車まで何回も往復して荒れ狂う台風から脱出した。雨でびしょぬれになって小屋を脱出した経験は、きっと大人になっても記憶に残るであろう。

(武石雄市)